1956年9月　天　氣　Vol. 3 No. 9

名誉会員岡田武松先生をしのぶ

我々の敬愛する岡田武松先生は，心臓麻痺のため9月2日の早朝千葉県我孫子町布佐の御自宅で永眠されました．先生は1874年8月18日の御出生で，1889年東京帝国大学理科大学物理学科を御卒業，直ちに中央気象台に入って，予報課勤務，予報課長，神戸の海洋気象台長，中央気象台長を歴任され，1941年に勇退されたのでした．また1931年にお帝国学士院会員に選ばれ，1950年には文化勲章を受けておられます．

先生は1900年からの本会の会員であり，実に半世紀以上にわたって，本会会誌の編集委員として，本会の役員，会頭および理事長として，またよき助言者として，我々の気象学会を本当の意味の科学的に育て上げて下さったのでした．

先生が入られた頃の中央気象台は総員が僅か30名位だったと言います．こういう環境の中で研究をすることがどんなに困難であったかは，たやすく想像の出来ることです．それにもかかわらず先生は続々と研究論文を発表され，気象集誌及び国内出版物は申すに及ばず，独文のものは Meteorologische Zeitschrift に，英文のものは Monthly Weather Review 及び Quarterly Journal に寄稿されました．

先生の御研究の特徴の1つは非常に幅の広いことにあると思います．最初は湿度計，雨滴，日射等に関する実験的研究をやられましたが，その後地中温度や積雪の熱伝導等というやや理論的なものに興味をむけられました．しかし何といっても先生のお仕事の中で一番重きをなすのは実際に予報をやって問題になったことを，その頃に入手し得る限りの資料によって解析し研究されたものです．

梅雨の研究もその1つです．先生のお考えに対し，その後色々の修正がつけ加えられましたが，根本の考え方は動いていないと言ってもよいでしょう．もう1つは極東における気候の相関，東北凶冷，北海道の米作と気象等を1群にして考えますと，それは今日の季節予報の基礎をなしています．それから台風の発生についての研究や，低気圧，高気圧の運動に関する岡田の法則は，後に渦に関して多くの研究者を刺戟し，それが渦度保存の法則に実を結び，今日の数値天気予報につながっていると考えてもよいでありましょう．

また今日我々に親しい言葉になっている台風は，1912年頃から颱風と一定して使われており，その前は大風，颶風，颶颱等と混乱しております．この用語の統一も先生の御功績の1つと考えられるのであります．

また先生は気候学についても興味をもたれ，英文で〝Climate of Japan〟という大部のものを中央気象台欧文報告の1冊として出版されましたし，〝日本及び隣邦気象図〟という立派な気候図も編集されました．

先生の著わされた論文の数は和文，欧文合せて約百篇，著書は十数点に及んでおります．ことに〝気象学〟はちょうどこういう程度の教科書の日本文で書かれたものがなかったことのために，このおかげをうけた学生の喜びはたとえるものもない位でありました．

英国気象学会はその1924年1月の年次総会で日本の岡田武松先生にSymons記念金牌を贈りました．このSymons賞牌というのは1年おきに1人の気象学者，そして1回ごとに英国人と英国以外の人を代るがわる選ぶことを内規としているもので，この賞牌を受けることは気象学者として最高の名誉であります．この受賞者には先生の前には成層圏の発見者として有名なフランスの Teisserenc de Bort があり，1953年にはスエーデンの C. G. Rossby が選ばれているという，1，2の例をあげてもこのことはすぐわかるでありましょう．これより先1921年に同学会は先生を名誉会員に推薦しております．

先生はまた海洋学，地震学，地球磁気学にも深い理解と興味とを持たれ，海洋と気象との相関ということでは立派な御研究もあり，これらの方面の研究者を鼓舞されることは盛んでした．

我々は先生の博識にあまりにも頼りすぎていたようです．今急に先生の御逝去にあい，闇夜に燈を失ったような困惑した悲しみに打たれております．しかしよく考えてみますと我々はそう悲しまなくともよいのかも知れません．我々は先生の残されたたくさんの論文と著書とをいつでも見ることが出来るのです．先生の論文や著書の中にさりげなく書かれてあることが，私どもの中途でつっかかって動きのとれなくなった研究を，もみほぐしてすらすらと動くようにしてくれることがきっとあると思います．また先生の文章の中には研究者を激励する言葉が，表からの言いまわしや，裏側からの言いまわしで沢山あるのです．研究の上でも心持の挫けた時は先生の文章を読ませてもらおうと思います．

畠山久尙